

全国青年ボランティアセンター ニュースN07（宮城版） 5月6日

被災地の現状と住民の心にふれて「少しでも力になりたい」 —参加者の感想から

全国青年ボランティアセンターは4月27日の開設以来、延べ183人の青年がボランティア活動に参加しました（5月6日現在）。一日で44人の青年が参加する日もありました。ボランティアの多くは5日朝に帰途につきましたが、残った大阪のメンバーと宮城の青年といっしょに最終日の8日までボランティアを頑張っています。今回はいままでの参加者からよせられた感想を紹介します（一部編集しています）。

○住民一人ひとりの命と生活を守るために少しでも力になりたい

（兵庫 Bさん・4月30日、南三陸町に物資を届けて）

被災地のあまりにも無残な状態を目の当たりにして、その直後に救援物資を取りに出てこられた住民の一人ひとりを見ると、あんなに大きな地震と津波の中で、本当に無事でよかったと思って涙があふれてきました。せっかく無事だったかけがえのない命や1人1人の生活を守るために、私も少しでも力になれる事があればと思うので、頑張ります。

○津波の被害は果てしない。政府はもっと保障をつよめて!!

（大阪 Nさん・5月2日、亘理町、農園の泥撤去作業をして）

（イチゴのビニルハウス内の）80うねのうち3うねくらいしかできなくて、もっともって人手が必要だと感じました。農家の奥さんが「11月～3月の収入は維持費で4～6月に出荷するイチゴは一年分の生活費。これからどうしたらいいのか。家は半壊で住むことができず、イチゴの収穫小屋に住んでいる。ビニルハウスも1つ1000万円もかかる」と途方にくれていました。地震・津波から一ヶ月半でこのありさま。政府はもっと保障してほしい。ボランティアももっと強めないと!!

○積極的に行動していくことが大切だと思った

（和歌山 Yさん・5月2日、岩沼市で活動して）

がれきをビニルハウスから少し離れた空地へ一輪車で運ぶ作業をやりました。昨日、今日と家が全壊していなくても、庭先や自分の田畑などが土砂で埋もれていたり、農作物や木々が津波による塩分でダメになったりと生活していくための糧がなくなっている人がたくさんいて、地震が起きる前の生活状態に戻れるまでかなりの時間がかかると思いました。被災していない自分たちが被災された方に何らかの形で支援して行こうと積極性をもって行動していくことが大切だと思った。